

# 「出る」と *Sortir*

## ——トポロジー空間の召喚と構築的意味論——

伊 藤 達 也

本稿は、日本語の動詞「出る」とその仏語における等価語彙とされる *Sortir* の意味の記述を通じ、両動詞の意味的多様性の中心として把握できる意味論的実体 (*identité sémantique*) を把握することを目的とする<sup>1</sup>。同時に、両動詞の意味構築における関与項目の特定も重要な課題となる。

観察対象となる語彙はそれぞれの言語の中で他の語彙との関係において存在しているため、類義語との比較が欠かせない。ここでは「出る」に対しては「発つ」が、*sortir* に対しては *partir* が比較の対象となる。他方、これらの動詞の記述には、品詞と態の問題も関係する。一般的に「出る」は自動詞であるが、「出す」は他動詞であると考えられているが、本稿は「出る」を対象としながら「出す」の用法の観察をも排除しない。なぜなら、ある語彙の統語的な帰属 (品詞属性や態) は意味論に後付けされた付加的な要素に過ぎず、ある語彙の意味論的な実体はあらゆる統語的操作に先行するという意味論の自律性の仮説に基づいて記述を行うからである。したがって、意味論的実体は具体的な世界との指示関係に基づくのではなく、位相幾何学 (トポロジー) 的かつ力動的に変形可能な形式 (フォルム) として抽出される。本稿では「雨が降り出す」などに見られる「出す」の補助動詞的用法も排除する事なく「出る」の意味論的実体の特定に利用するが、用法の多様性の中で不変の心的操作こそが「出る」の意味論的実体と考えているからである。

最後に「出す」と *Sortir* との助詞 (日本語) および前置詞 (仏語) との組

み合わせの生み出す意味の違いを考えたい。具体的には「～を出す」「～から出る」、*sortir de*, *sortir par* の違いの説明を試みる。また *sortir* と *partir* を含む仏語の前置詞句 *à partir de*, *au sortir de* の違いも同様の考え方で説明する。

### 1.1. 「出る」

「出る」は一般的に移動動詞であり、「内側から外側への空間的移動」という説明が第一に挙げられる<sup>2</sup>。この直感的な定義は、位相幾何学的な記述とこの語彙の意味の記述がなじみやすい傾向を先取りしている。

まずは空間移動に直接関係する例から見てみよう。

- (1) 家から外に出る。
- (2) 校門を出る。
- (3) 社会に出る。

すでにこれらの例の「出る」が使用される文脈において、周辺に内部、境界、外部に当たる語彙の出現が観察できる。(1)では「家」は内部そして「外」は外部を、(2)では「校門」は境界を、(3)では「社会」は外部に相当する語彙である。これらの語彙は動詞「出る」が召還する環境に呼応して出現していると考えられる<sup>3</sup>。

しかし以下のように、内部、境界、外部が表面上、語彙として現れない例もある。

- (4) 買い物に出る。
- (5) 迎えに出る。

解釈上は(4)と(5)でも「出る」の意味が空間移動に関する事は明白だが、

「買い物」も「迎え」も外出の目的を表すだけで、「どこから」「どこに」「どこを」通って」出たかは明示されていない。家から雑貨屋へ「買い物に出る」ことも、電車からホームの売店へ「買い物に出る」こともできるのである。また犬が駅まで「迎えに出る」ことも、首相が大統領を空港まで「迎えに出る」こともできる。いずれの場合も、「出る」の意味論にはすでに、どこかから、どこかを通ってどこかへ「出る」ことが含まれている。つまり「出る」とはある「内部」から「外部」へ「出口」を通じて移動することであり、ひとつひとつの具体的な名称が文中に表現されなくとも、この図式は「出る」の意味論的実体の最も重要な部分である。

また「出る」には比喩的と見なされる用例もある。

#### (6) 大学を出る

(6)の解釈としては「卒業する」という意味が一般的で、「出る」はここでは空間的な移動とは無関係である<sup>4</sup>。この場合は、大学が敷地としてよりも、「4年間で修めるべき課程を有する教育機関」として立ち現れてくる。この文脈は空間的であるよりも、時間的、条件的なものであるが、トポロジー的には「内部」として同位相である。「内部」の提供する条件を満たしたので「出口」を通過して「外部」へ出る。この活動が「大学を出る」ということであり、場所の移動の意味から比喩的に転意したわけではないのである。「内部」が条件的に飽和し、「外部」へ移動するということは「出る」の抽象的レベルでの意味的実体そのものである。(6)の「卒業する」という意味は、この抽象的な構造が言表の中で組み合わせられた語彙（この場合「大学」）との相互作用により構築されたのである。

同様に「田舎を出る」は、空間的な移動であると同時に、田舎に住み飽きて都会へ脱出する、という意味を持ちうる。「出る」は単なる空間の移動ではなく、「内部」に見立てられる語彙がどのような性質を持つかにより意味に多様性が生じるのである<sup>5</sup>。

他方、空間ないし条件の、いかなる意味でも「内部」と解釈できるものが示されない場合がある。

- (7) なくしたと思った万年筆が出てきた。
- (8) 霧が出る。
- (9) 熱が出る。

この場合、どこかから（出所は曖昧なままである）、見えなかったものが急に出現したという意味である。目に見えない隠された場所から、目に見えるこの世界への移行、換言すれば、不在から存在への移行がマークされている。

「出る」の召還するトポロジー領域：内部、外部、境界はこのような場合でも存在すると考えられる。語彙的要素として現れない「不在」が「内部」に「存在」が「外部」に相当する点が異なるのである。言表内の語彙的要素「万年筆」「霧」「熱」は「内部」「外部」「境界（出口）」のいずれにも該当しない。「霧」や「熱」は一般的な状況では隠されており、時として感覚可能な姿で出現する。「万年筆」は「なくしたと思った」という節に限定されることで、「霧」や「熱」に近づく。「なくしたと思った万年筆」は突然、不在があたかも飽和したかのように、存在の形態へと移行するのである。トポロジー的には、内部の走査完了、外部への移行という心的走査が存在している。

近い例だが微妙に異なる以下の例を見てみよう。（ ）内は「出る」のそれぞれの文中での意味を記した。

- (10) 人前に出る （登場）
- (11) 選挙に出る （出馬）
- (12) この政治家は映画に出たことがある （出演）
- (13) 童話に出てくる家のようにだ （出現）

(7)-(9)と同様(10)-(13)の中の「出る」は移動よりも、出現、存在化の意味に近い。「人前に」「選挙に」「映画に」「童話に」は、時空間的な現存を備えた現実的な場所ではなく、出現や存在化の発生するフィールドを表している。トポロジー空間的にはこれらは、外部に当たる。内部はこの外部に対して質的に対立する領域として定義される。例えば、「選挙に出る」であれば、「出馬しないこと」が内部である。質的に正反対の外部領域へとある対象（この場合、人ないし家）が（心理的・物質的抵抗を打ち破って）出ることが、ここでは問題になっているのである。

指摘できるのは同じ「～に出る」でも「選挙に出る」は「買い物に出る」とは「出る」の担う意味が異なっていることである。選挙に「出る」は、「出馬する」を意味するのに対し、「買い物に出る」は、買い物のために「家を出る」「外出する」を意味する。同じ動詞「出る」に同じ助詞「に」を組み合わせても、共起する名詞の性質に「出る」の意味はより強い影響を受けているのである。

以上のような観察から、「出る」の意味論的実体を以下のように定義できる。

FS：「出る」は内部、境界、外部を備えた空間を召還（convoquer）し、対象  $x$  が（文脈から質的に提供される）内部に相当する領域の（空間的、条件的、時間的、存在論的）走査（parcours）を完了し、境界を出口とし外部に移動することを喚起（évoquer）する。

この定義に含まれる内部、外部、境界（出口）はトポロジーの概念であり、実際の場所を指示している訳ではなく、関係性を表している。トポロジー空間内の内部と外部は質的に非対称的である、内部は閉じられており、外部は開かれている。内部と外部は絶対的な距離を持っているのではなく、離接しているが質的に正反対の性質を持つ。内部と外部の間に位する境界（出口）とは内部の終点であると同時に外部の始点である。境界は

したがって、内部であると同時に、外部であるとも言える。

また *Parcours* (パルクール、走査、スキヤニング) は、フレーゲの *Wertverlauf* に由来するキュリオリの概念で、閉じられた領域が構築され、その領域中で全ての価値(要素)が次々に走査(スキヤン)されていき、最後に「出口」から外へと到るオペレーションのことである。この操作の終了は、外部への脱出が指標となる<sup>6</sup>。

## 1.2. 「発つ」

直感的には「出る」と「発つ」は意味的に類似しており、以下の例のように意味内容がほぼ同じになる場合がある。

(14) 新幹線は9時に京都を発った。

(15) 新幹線は9時に京都を出た。

(14)-(15)ともに、ある移動可能な物体(この場合「新幹線」)がある地点(京都)を離れる、という空間移動を表現している点で、ほぼ同じ意味と解釈できる。指示対象としてはほぼ同じ活動を表現する「出る」と「発つ」の違いは、両者の意味論的実体の差から把握することが有効である。

「発つ」は本質的には起点から離れることを表現している。それに対し「出る」は既に見た通り、「内部」領域の走査の完了後に出口を通じての外部への脱出という操作を表現している。端的には「出る」は内部の走査完了を(内部と、境界(出口)が強調される)、「発つ」は起点からの離脱を(境界(出口)と外部が強調される)。つまり、「出る」とは対照的に、「発つ」では内部はそれほど重要な問題にはならず、問題になるのは、外部のみであり、内部はそこからの出口(つまり外部と接した内部=境界)「起点」としてしか現れない。また、これに伴う外部の活性化は、「発つ」をよりテレオノミー(目的論)的動詞にしている。「出る」は目的とは関係なし

に、内部の走査の終了の結果外に出るにすぎないが、「発つ」はたとえそれが明示されなくても、何かの目的のために外部へと離脱することを含んでいるのである。

「京都を出た」が様々な駅を往来する新幹線の京都通過の客観的な記述であるのに対し、「京都を発った」は、京都が起点であり、特定の目的地に向かって、あるいは強い決意とともに、出発したという含みを持つ。このため「発った」の方は、「出た」よりも離別の意味が強く、二度と戻らないというニュアンスさえ生じうるのである。この意味に「発つ」における外部の活性化が生きていると考えられる。「出た」では、京都はいくつかある新幹線の駅の一つでしかなく、再び戻ってくる可能性を含んでいる。

「大学を出る」は「卒業する」の意味を含むが、「大学を発つ」は卒業の意味は含まれず、大学の敷地から離れ別の場所に向かう意味しか持たない。「出る」は「大学」の制度的内容（＝内部）を呼び出し、それが要求する課程の飽和を表すのに対し「発つ」は「大学」を起点（＝境界）としか見なさない。また「大学を発つ」は目的（地）がはっきりしているというニュアンスが含まれる。「大学を出たけれど…」と言えるのに対し、「??大学を発ったけれど…」とは言いにくいのは、目的（地）なしに「発つ」事は出来ないからである（前者は「卒業」を後者は「移動」を表しているという違いはここでは無視する）。

また「発ち」は「立ち」と同源であるとはよく知られており、「旅立ち」などとも書かれ、「立つ鳥後を濁さず」などでも「直立している」よりも「飛び立つ」の解釈が自然で、現代日本語で「発つ」と「立つ」の使用は混乱している。同時に「発ち」は「裁ち」、「絶ち」、「断ち」とも源を一つにする語彙単位であると考えられている。「発つ」の根本的意味と考えられる「外部の活性化」は「起点からの離脱」（具体的には、水平方向の離脱が「発ち」、垂直方向の離脱が「立ち」と分類出来る）と「切断」（何を、何で切断するかにより、「裁ち」「絶ち」「断ち」など異なる漢字が割り当てられている）として実現化する。直感的に異なる領域に属する行為であるた

め、漢字による書き分けが慣用化されていったのであろう。いずれにせよ、「発つ」「立つ」「裁つ」「絶つ」「断つ」には離脱（切断）の意味が中心的である。

### 1.3. 「出す」

「魔術師が帽子から兎を出すかのように」*comme un magicien sort un lapin de son chapeau* はフランス語でよく使われる言い回しだが、日本語の「出す」とフランス語の *sortir* が完全に対応している。*Sortir* はこのように他動詞としての用法もあるが、日本語の「出る」は他動詞では「出す」となる<sup>7</sup>。

「出す」には以下の例のように、「出る」で確認したほとんどの意味が観察できる。

- (16) 机の引き出しから眼鏡を出す。(空間移動)
- (17) 3人の子供を大学まで出した。(学業修了)
- (18) 転んで血がでた。(出現)
- (19) どこに出しても恥ずかしくない傑作(登場)

これらの場合、「出る」と同じメカニズムが意味の構築に貢献していると考えられる。(16)では、「机の引き出し」という、閉じられた内部空間からより開かれた外部へと「眼鏡」を移動させることであるし、(17)では「大学」という語彙により、内部が修了すべき課程を備えた制度として設定される。(18)の「血」は、皮膚の内部に留まり見えなかったものが転ぶ事によって出来た傷口という出口あるいは境界を通じ、皮膚の外部へと出現することを意味している。したがって、他動詞／自動詞を問わず、「出る」の意味的実体は一貫して存在し続けるのである。すでに述べたように、意味論的実体はあらゆる品詞的帰属に先行する心的操作であるため、「出る」



の定義はここでも有効である。違いは、自動詞の「出る」では移動する対象  $x$  が主語として表されるに対し、他動詞の「出す」では目的語で表されるということなのである。

#### 1.4. 「～出す」(補助動詞)

「出す」は、補助動詞として起動相を表す「～出す」としても使用されるが、品詞的帰属の変化を経ても「出る」意味の本質は残存すると考えられる。

以下の二つの文の比較から始めよう。

(20) 本を読み出す。

(21) 本を読み始める。

「出す」と「始める」は起動のアスペクトを表す補助動詞として、ほぼ同じ機能を持つと見なされるが、細かいニュアンスを汲み取っていくとそれぞれの動詞の本質に基づく差が観察できる。(20)の「本を読み出す」では、何か直前に行っていた行動があり、それが終わって、急に読書を開始する行為がイメージされる。それに対し(21)の「本を読み始める」では、先行する行為の完了の後、別の行為の開始という含意はない。「突然」「急に」などは「読み出す」となじみやすいのに対し、「ゆっくりと」「何の気なしに」などは「読み始める」と共起しやすい。この事からも、「読み出す」には、事前に行っていた質的に異なる別の行為からの移行が含意されるのに対し、「読み始める」にはそれがないことが見て取れる。別の動詞との組み合わせではその差が顕著に現れる例もある。

(22) 笑い出した。

(23) 笑い始めた。

(22)「笑い出した」では何かをきっかけに突然笑い始めた印象であるが、(23)「笑い始めた」ではゆっくりと笑い始めたという印象の違いがある<sup>8</sup>。

この(22)には「きっかけ」に当たるものが文脈に書き込まれていないにもかかわらず、補助動詞「～出した」の存在が「内部とそこからの出口」を呼び寄せそれが急激な質的变化を構築するのである。つまり「出る」が文脈の補助なしに、「閉ざされた場所から開かれた場所の出口を通過しての脱出」を意味してしまうと同様、「～出す」は抑えていたものが、あるきっかけを通じて（内部的条件の飽和）、解放へと向かうという一連の意味を本動詞に付加する。語彙的単位「出す」の意味論的本質「内部の走査の完了から、出口を通過して、外部へ移動する」という心的操作が補助動詞としての使用でも健在なのである。

### 1.5. 「出」（名詞）

「出」は名詞としても存在し、大きく分けて二つの意味がある<sup>9</sup>。第一に「官僚出の政治家」など「前職」、「出自」、「出身」を表す用法があり、第二に「出入り」「出不精」、「出嫌い」などでは、「出」は「外出」の意味がある。出口の部分と外に移行する活動の部分の二通りの解釈可能性がそれぞれ名詞の二通りの意味に結晶化している。また「出だし」などの「開始」という意味にも注目する必要がある。「開始」とは時間的な意味での「出口」である。「出口」にはそこへ至るまでの「内部」の「走査」が前提とされ、それにより、通過後には激的な質的变化が引き起こされる。

「出」には（前置詞や助詞と同様に）空間的意味だけでなく、時間的意味もあり、抽象的レベルで語彙の実体を把握するには、現実世界で区別されている2領域を抽象的に図式（スキーマ）として表現できる道具が必要である。この必要性はトポロジーの概念を語彙の特徴づけに利用する動機を補強する。

## 1.6. 「～を／～から出る」の違い

助詞の「を」は西洋語の文法概念との関連では対格の機能を表す格助詞とされ、実際、他動詞の目的語をマークする用法が中心的だが（「本を買う」、「映画を見る」）、現実的には、自動詞とも共起（「空を飛ぶ」「運動場を走る」）することはよく知られている。（cf. 竹林（2007））

「大学を出る」「家を出る」なども、「を」が自動詞と共起するタイプの一例である。また「窓から外に出る」など、助詞「から」も「出る」と共起する。（意味論的には）言表において、意味構築の中心的な要素は動詞である。「出る」に関していえば、曖昧な表現「～に出る」が「買い物」「外」などの名詞による補完を受けた後でなければ意味の構築（目的か場所か）が完了しないことはすでに見た。それでは、例えば、「電車がトンネルを／から出る」において「を」と「から」は何をマークしているのだろうか。

本論では「出る」がトポロジー空間を呼び起こすという仮説を支持しているが、「を」「から」はこの召喚された内部、境界、外部という動詞によってあらかじめ構造化された空間内で機能していると考えられる。その前提にしたがえば、「を」は内部を「から」は境界をマークすると考えられる。（ちなみに、「に」は外部をマークすると考えられる）実際、からは内部と外部に接する「出口」の解釈しか成り立たない対象と共起し、閉じられた内部的空間を前提とする対象は「を」でしか受けられない（「\*ドアを出る」／「ドアから出る」／「\*窓を出る」／「窓から出る」）。「部屋から出る」／「部屋を出る」は両方可能だが、「部屋を出る」の方は部屋を内部として、「部屋から出る」の方は「部屋」を境界（出口）として捉えているのである。トンネルの例に戻れば、「を」はトンネルを内部、つまり活動が起る空間として、「から」は活動の終了点である出口（境界）として捕らえているという違いがある。この説明は「から」により強い「越境」性を指摘する森田（1989：772）の記述と呼応する。

助詞はこのように動詞と共起する語彙を動詞の意味論と調整していると

考えられる。しかしながら、「出る」と使用される場合は、「を」が内部をマークするといつて、他の動詞と使われるときも同様とは限らない。助詞の意味論の体系的な研究と共により大きな一般化が必要であろう。

## 2.1. *Sortir*

日本語の「出る」同様、仏語の *sortir* は「内から外への移動」を表す動詞である<sup>10</sup>。 *Petit Robert* も *sortir* の第一義として“*Aller hors d’un lieu, du dedans au-dehors*”(ある場所の外へ行くこと、内から外へ)と記している。以下が典型的な例である。

(25) Paul est sorti de son bureau. (ポールは事務所から外へ出た)

(26) La faim fait sortir le loup du bois. (飢餓が狼を森から外へ連れ出した)

同時に日本語と同様、どこからどこへという場所を明示せず、単に「外出する」「出る」という意味の場合もある。以下がその例である。

(27) Elle sort peu. (彼女はほとんど外出しない)

(28) Nous sortons tous les soirs. (我々は毎晩外出する)

(29) L’eau sort de la source. (水が泉から湧き出ている)

また *sortir* には他動詞用法もある。

(30) Il va sortir un nouvel album. (彼はもうすぐ新しいアルバムを出す)

(30)でも *sortir* は日本語の他動詞「出す」と重なっている、(25)-(30)の例を見て行くと、「出る」と、*sortir* の出現する環境は極めて似通っていることから、「出る」について考えられた図式と類似する領域の存在が仮定

できる。すなわち、閉ざされた内部とその走査完了にともなう外部への出口からの脱出という心的走査である。*sortir* は、ほぼ「出る」と同様、文脈にトポロジー領域である内部、境界（出口）、外部を呼び起し、意味を構築していると考えられる。

## 2.2. *Sortie*

*Sortir* の名詞形の *sortie* には大きく二つの意味があり、第一に外へ出る行為、第二に「出口」という場所を表す場合である。第一の場合は動詞の取りうる意味の広がりがあるまま名詞に持ち込まれている。*Depuis la sortie de mon pays*（自分の国を出て以来）、*La sortie des élèves*（生徒の（学校からの）帰宅）、*sortie pour prendre l'air*（空気を吸うための外出（散歩））、*La sortie d'un nouveau modèle de voiture*（新型車種の登場）などである。第二の意味の場合は英語の *exit* 同様、「非常口」という表示に *sortie* は使われている。この事自体、日本語の「出口」という名詞と同様である。「出」（名詞）にも「出る」のあらゆる変異が名詞に置き換わったものと加えて、「出身」という意味もあったことはすでに見た通りである。

## 2.3. *Partir*

*Sortir* としばしば似た意味を取る動詞 *partir* は現代フランス語で「発つ」「出発する」に相当する動詞であるが、語源的には元々このような意味が備わっていたわけではな。*Partir* は「分割する」「部分に分ける」「共有する」「分配する」を意味するラテン語の *partire*（古フランス語 *partiri*）に由来し、12世紀初頭に「分割する」に含まれる「分離」の意味から、現在の意味が派生したとされる。ちなみに派生語 *part* および *partie* は現代フランス語でも、「分割されたもの」「部分」という意味を残している。

この「分離」の意味に起源を持つことから予測できる通り、*partir* は日本

語の「発つ」と非常に近い性質を持つのである。現代語では *partir* は「出発する」という意味であり、*Petit Robert* の第一の定義は、“*Se mettre en mouvement pour quitter un lieu, s'éloigner*”（ある場所を離れるために動きだすこと、遠ざかること）である。

*Partir* の用例を見ていくと、*sortir* と意味的に近く、置き換え可能なケースも多い。これも日本語の「出る」/「発つ」のと同様で、*Partir* は「発つ」同様、起点からの離脱を表していると推論できる。事実、*partir* には「発つ」同様、目的（テレオノミー）指向性が確認できる。目的（地）なしに *partir* することは不可能なのである。

#### 2.4. *A partir de, au sortir de*

*Sortir* と *partir* を含む、前置詞句にもそれぞれの構成要素の本質的意味に基づく違いがある。*Sortir* を名詞として使用する前置詞句 *au sortir de* には (1)「去り際に」(en quittant) Ex. *au sortir de Bordeaux*、(2)「終わりに」、「最後に」(à la fin de) Ex. *au sortir de l'hiver, au sortir de l'enfance*、(3)「～を終えて」*à la sortie de, au sortir de la messe* の意味があり、時間、空間表現ともに使用できる。

他方、*à partir de* は「から」という意味であり、*produire l'électricité à partir de la paille agricole* 「藁から電気を生産する」などが例である。この場合も手段／方法を表しうる日本語の「から」と重なる。他の例、*Gravure de portraits à partir de photos* は「写真から（アクセサリなどに）肖像画を彫刻する」の意だが、この場合も *à partir de* と「から」が対応する。写真を起点として出発して、別のものへという物質転換と目的指向が現れている。

*À partir de 19 h* 「19時以降」の場合、19時が起点と見なされるが、19時を境界とし、それ以前（＝内部）は喚起されず、19時から以降つまり外部のみが活性化されるのである。

(31) Spectacle Jeune Public à partir de 3 ans.

(32) Location de voiture à partir de 30 euros.

この例で、*à partir de 3 ans*, *à partir de 30 euros* という場合、文字通りには「3歳から」、「30ユーロから」を意味するが、この場合 *à partir de* が表すのは日本語の「から」と同様「以上」という意味である。つまり *à partir de* の補語として現われる語彙は最低点（起点）として機能しており、そこには何らかの方向性、上位へ向かう段階が導入されている。

コテキストに量の表現が現われると、数列的な序列、段階という意味論が現れる。*Partir*の呼ぶトポロジー空間との相互作用で、小さい数から大きい数へと増化移動していく意味論が付加されるのである。

*Au sortir de* はそれに対し、内部の飽和点としての境界（出口）を指向する。*Au sortir du théâtre*（劇場の出口で）では、劇場という閉じられた空間の開かれた外部との接点が指示されているのである。*Au sortir d'un entretien*「対談の終わりに」なども外ではなく、内部（対談）の最後が指示され、常に内部に残留しているのである。

### 3. 結論

「出る」と *sortir* はともに本質的意味として、閉じられた内部空間の走査を完了し、出口（境界）から外部へ脱出するという抽象的操作を喚起すると考えられる。これは「発つ」と *partir* が起点（トポロジー的には境界）から外部への離脱を本質的に意味することと対照をなす。「発つ」と *partir* には「断絶」の価値（「発つ」は「断つ」「絶つ」と同根、また *partir* には古用法では *partager*（分ける、分けたものを共有する）の意味があった）が中心で、走査は関係しないかわりに、「外部」に関係深い目的指向の価値が備わっている。この本質的意味は、統語的なあらゆる操作に先行し、品詞的帰属とは無関係に存在する意味論的本質と考えられる。自／他の区別

(「出る」は自動詞であるが、「出す」が他動詞形として存在し、*sortir*にも主要な自動詞用法の他に他動詞用法も存在する)は語彙的単位の意味論には影響せず、むしろ語彙的単位が文脈に要求する語彙的な情報(助詞、前置詞)が意味の特定化に関与している。

第二の結論は、考察の対象となった動詞と共に起する助詞および前置詞が、それらの語彙固有の意味論(それについては、ここで記述することはできなかった)とは独立して、動詞の召喚するトポロジー空間を前提に機能していることである。すなわち「出る」では「を」が「内部」、「から」が「境界」、「に」が「外部」を、*sortir*(自動詞)では*de*が「内部」、*par*が「境界」、*pour*が「外部」をマークしている。

## 注

- 1 理論的枠組については、Franckel (2003)、Oguma (2006)、Franckel & Paillard (2003)等を参照。
- 2 現代語の「出る」は語源的には古語の文語「いづる」から派生した。
- 3 「召還 (convocation)」は B. Victorri の概念で、ある特定の語彙が周辺にコテクスト (co-texte) を召還するという考え方に基づく。語彙は召還されたコテクストの中で意味論的実体を「喚起 (évoation)」し意味を構築すると考える (cf. Victorri & Fuchs (1996))。なお、助詞の役割についてはここでは無視する。
- 4 「大学から出る」ならば「敷地から外へ出る」という解釈が強くなる。この問題については後に論じる。
- 5 「刑務所を出る」も場所の移動よりも、刑期を終え、「出所する」という意味になるので、内部の走査完了(条件の飽和)の類似例である。
- 6 走査の定義としては以下がある。Parcours (operation de) (Scanning operation) : Opération de détermination sur une classe, un ensemble ou un domaine notionnel consistant, pour l'énonciateur, à envisager successivement tous les éléments sans en choisir aucun [...]. (Groussier M. L. & C. Rivière (1996 : 137)). 和訳「走査(スキヤニング・オペレーション): クラス、集合あるいは概念領域の中の全ての要素を、どれかひとつを選択するのでなく、継続的に検討していくことからなる



発話主体による限定操作」。Groussier M. L. & C. Rivière (1996)は英語の *any, whoever, whatever, wherever, whenever, however* の中にある *-ever*、または否定の *never* およびフランス語の *tout, n'importe qui, jamais* などを走査のマーカーとして挙げる。Culioli 自身は疑問表現を例として挙げることが多い (cf. Culioli (1985) (1990) (1995))。走査には、要素の検討の仕方に応じて、二種類ある。円滑走査 (smooth scanning/*parcours lisse*)、粒状走査 (*granular scanning/parcours rugueux*) である。使用範囲の広い概念だが、アスペクト・マーカーに分類されがちな中国語の「了」の多様な用法の統一的核として走査のオペレーションを指摘する研究もある (cf. 劉 (2006))。

- 7 自動詞／他動詞の区別は広く様々な言語で観察され、それぞれの文法的伝統の中で動詞を区別するカテゴリーとして機能している。(cf. 角田他編 (2007)) 日本語、フランス語でも同様であり、日本語では自動詞、他動詞、フランス語では *verbe intransitif, verbe transitif* という名称が一般的に使用される。自他の区別は、動詞に内在するという考え方が一方、同じ動詞でも、自動使用法、他動詞用法があることから、それを疑問視する考え方も存在する。本論では自／他の区別を少なくとも動詞の意味論に内在されたものとは考えない立場をとる。すなわち、動詞の態 (*voix, diathèse*) は意味論のレベルでは規定されておらず、あくまでも、目的語となるコテキストがどのような形で、動詞の意味論に接続するかにより、決定されると考えるのである。
- 8 ??彼はだんだん笑い出した／彼はだんだん笑い始めた。??彼はゆっくりと食べ出した／彼はゆっくりと食べ始めた。
- 9 「読みでがある小説」などの「甲斐」を意味する「で」は同音異義語としてここでは扱わない。
- 10 *Sortir* は現在「出る」の意味で最も一般的に使用されているが、16世紀以前には移動動詞としては使用されず、代わりに現在名詞のみ存続している *issue* (出口) の動詞形である *issir* が使用されていた。語源的にはラテン語の *sortiri* (くじ引きをする) に由来し、中世仏語で *sortir* はこの意味のまま使われており、そこから「予測する」の意味が生じている。現代フランス語の名詞の *sort* には「運命」という意味が今でも残っている。

## 参考文献

- Culioli, A. (1985) *Notes du séminaire de DEA 1983-1994*, Potiers.
- Culioli, A. (1990) *Pour une linguistique de l'énonciation, Opérations et représentations*, Tome 1, Ophrys, Paris.
- Culioli, A. (1995) *Cognition and Representation in Linguistic Theory*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam, Philadelphia.
- Franckel, J-J. éd. (2003) “Le lexique entre identité et variation”, *Langue Française*, 133, Larousse, p28-41.
- Franckel, J-J. & D. Paillard (2007) *Grammaire des prépositions*, Tome 1, Ophrys, Paris.
- Groussier, M. L. & C. Rivière (1996) *Les mots de la linguistique, Lexique de linguistique énonciative*, Ophrys, Paris.
- Oguma, K. (2006) “Identité et variations du verbe *yaru* en japonais”, in *Constructions verbales & production de sens*, D. Lebaud, C. Paulin, K. Ploog, édés, Presses universitaires de Franche-Comté.
- Victorri, B. & C. Fuchs (1996) *La polysémie*, Hermès, Paris.
- 竹林一志 (2007) 『「を」「に」の謎を解く』笠間書院
- 角田三枝、佐々木冠、塩谷亨編 (2007) 『他動性の通言語的研究』くろしお出版
- 森田良行 (1986) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 劉綺紋 (2006) 『中国語のアスペクトとモダリティ』大阪大学出版会